

# Social Coordination Letter



## ごあいさつ

### 「人と人がつむぐ育み」

社会教育とは何か。

それは、人と人が出会い、つながり、共に育ち合う営みである。

課程を終えた学生たちは、自らの言葉で社会教育を語れる。

「人と人をつなぐ」「多様な価値観と出会う」「喜びを分かち合う」「心地よい居場所」「温かい空間」——その一つひとつに、希望の光が宿っている。

しかし、いま、世界は分断の危機にある。民主主義が揺らいでいる。

だからこそ、私たちは学び続ける必要がある。「持続的な平和」へ歩むために。

互いの違いを認め、多様性を尊重し、対話を重ねて、ゆるやかにつながることに。

それが、豊かな個人を育み、地域をつなぎ、社会を動かす原動力になる。

21世紀の幕開けは、国連が掲げた「ボランティア国際年」だった。

四半世紀後を経た2026年、再びその旗が掲げられた。

今こそ、多様性と出会い、学び合える環境とネットワークを再構築するときだ。

神大・社会教育課程を通じて、その土壌を耕し、あたたかな灯をともしていきたい。



小田原産〈木〉のスタディツアー

開催日時：2025年10月11日（土） 10：00～15：30  
 場所：ハルネ小田原、報徳二宮神社、生涯学習センター「けやき」  
 参加人数：15名  
 担当教員：齊藤 ゆか（人間科学部教授）



○目的  
 生涯学習や社会教育の現場を体験的に学ぶことを目的に、若者が楽しいと思える地域資源探しを行う。

○スケジュール  
 10：00 「ハルネ小田原」内の「木製品アンテナショップ TAKUMI館」  
 11：00 報徳二宮神社  
 13：00 小田原市役所にて巣箱作り  
 14：00 小田原市生涯学習センター「けやき」にて佐藤健氏講義  
 および「若者が森の中でやってみたいこと」のプレゼン

○学生の声  
 大学生という視点から挑戦してみたいこととして、ハルネに設置されていた小田原木材でつくられたテーブルとイスのセットを神大の中庭や図書館、3号館に設置してみたいと考えた。昼食や空きコマで学生に使ってもらうことで親しみを持ってもらい、普段機会のない自然に触れる貴重なチャンスになると思った。  
 横浜と小田原をつなぐためにTAKUMI館や小田原市と協力して、生協や神大フェスタで小田原木材を加工した商品を販売してみたい。神大生にも実際に手に取ってもらって小田原木材の魅力を知ってもらいたい。  
 （人間科学科 1年 O.S）

○連携・協力 小田原市森林組合 係長 佐藤健氏



横浜の社会教育施設を訪ねる

開催日時：2025年11月25日（水） 16：00～17：00  
 場所：神奈川県立青少年センター・神奈川県立図書館  
 参加人数：12名  
 担当教員：齊藤 ゆか（人間科学部教授）



○目的  
 公共における生涯学習・社会教育に関連する仕事（公務員）や県内の社会教育施設の視察を通じて現場を知る。

○当日の様子  
 青少年センターの長南悠太氏より、センターが担っている役割などをご説明いただいたのち、館内を見学。  
 青少年のひきこもりや、不登校や非行などへの対応の役割を担っている、「青少年サポートセンター」や青少年や県民の舞台芸術活動への支援の役割を担っている「ホール」を回りながら、施設の役割、活用方法などを聞く。  
 今回の施設巡りを念頭に、横浜まち歩きツアーを企画する。

○連携・協力 神奈川県立青少年センター 指導課育成係 長南悠太氏  
 学生考案「横浜まち歩きツアー」ポスター



開催日時：2025年7月20日（日）10：00～18：00/21日（月）9：00～18：00

場所：川崎市子ども夢パーク

参加人数：20名（履修者19名、ボランティア1名）

担当教員：西野 博之（非常勤講師・認定NPO法人フリースペースたまりば理事長）



○目的

多様な他者との出会い、リアルな体験活動を行うことによって、困難な課題に向き合える実践力を育む。様々な背景を抱える子どもたちとの直接的な関わりを通じて、子どもの気持ちの受け止め方を学び、子どもが発する「試し行動」に、どのように向き合い、コミュニケーションを図っていけるようになるかを学ぶ。

○当日の役割

20日（前日準備）

掲示物の作成・環境整備・ウォータースライダーづくり・『どろり』の土堀り・ミストシャワー・ステージ設営

21日（祭り当日）

受付・駐輪場整備・掲示・ウォータースライダー・ドラム缶風呂・どろり（泥のプール）



○学生の声

準備に何時間もかかっていたはずなのに、片づけはあっという間で体力的には疲れていたはずなのに不思議と終わってほしくない、もっといたいと思ってしまうほどの達成感を得ることができた。

この2日間の実習は、今まで行ってきたボランティア以上に得るものが多かった。子どもの様子、子どもと関わるうえでの役割、遊びとは何かを深く考えることができる機会だった。そして子どもの笑顔と成長に変えられるものはないと感じた。今後どんな大人になっても子どものために考え、寄り添い、環境を整え、一緒に遊び笑い合える人でいたいと思った。

（人間科学科 2年 Y.R）

私自身も子どものように全力で遊ぶという貴重な体験ができた。普段の生活ではなかなか泥まみれになるような経験はできないため、まさに“非日常”の実習となった。特に印象に残っているのは、ウォータースライダーで遊んだ時のことだ。滑り終わった子どもたちが笑顔でハイタッチをしてくれたり、泥を使って私の顔にメイクを施してくれたり、心から楽しい時間を共有することができた。そのような瞬間を通して、子どもたちとの距離が一気に縮まり、私自身も童心にかえって思い切り楽しむことができたように思う。

しかし、楽しいだけではなく、自分なりの反省点や課題も見えてきた。たとえば、ウォータースライダーから出る際に、階段の下の地面が非常に滑りやすくなっており、実際に滑って転んでしまう子どもも何人か見かけた。その場では、私は「滑りやすいから気をつけてね」と声をかけたり、小さな子には手を貸して降りやすいようサポートしたりしたが、後になって少し考えさせられた。夢パークの理念には、「失敗や危険も子供の学び」という考えがある。私の行動は、その子にとっての「転んで学ぶ」という経験を奪ってしまったのではないかと、という葛藤が残った。

また、作業中に遊びに誘ってくれた子どもへの対応も難しかった点のひとつである。その時は、「今は作業中だからごめんね」とやんわり断ってしまったのだが、断り方や伝え方にもっと工夫ができたのではないかと後悔している。子どもの気持ちを傷つけず、でも自分の役割もしっかり果たすにはどうしたら良かったのか。次に同じような場面に出会ったときには、「終わったら一緒に遊ぼうね」といった、前向きな言葉で応えることができるようにしたいと思った。（人間科学科 2年 W.T）



開催日時：2025年7月5日（土） 13：00～16：00

場 所：神奈川大学横浜キャンパス 3号館3階

参加人数：運営27名（3年23名・大人4名）

参加者382名 計409名

担当教員：齊藤 ゆか（人間科学部教授）寺嶋 正尚（経済学部教授）



### コンセプト

「まだ見ぬ星をみつけにいこう」

想い：自分の興味関心が向くような星を見つけたり、

自分に輝きかけているような星に出会ったりする場にしていきたい。

### 趣旨

若者が主体となり、地域・社会の課題を実践的に学び、「持続的な社会の創り手」になるための方策を発信し、共有する取組。

○若者らの関心に基づき、「テーマ」設定を行い、地域連携学習（Community-Based Learning=CBL）及び問題解決型学習（Problem-based Learning=PBL）などとして、プロジェクトベースで動く。

○若者らが、行政・民間（地域団体など）と協働して、「テーマ」に基づく地域・社会課題を実践的に学ぶ。（プロセス学習を重視する）

○「住みたいまち」「住み続けたいまち」に向けて、持続的な社会の創り手として、若者の観点から、地域・社会課題の発見と提案を行う。また、これらを、若者が若者に向けて情報発信・共有をする。

○大人は、若者参画の「見守り」に徹する。（見学は可能、口出しはしない）



### 実施主体

社会教育課程「地域デザイン演習Ⅳ」履修者  
（かながわユースフォーラム実行委員）

○学生代表：露口遥菜（人間科学部3年）  
副代表：佐々木真白（人間科学部3年）

### 実績と流れ

2020年度から年に1回実施。2025年度は6回目。

STEP1：地域課題の洗い出し・班分け（1～4月）

STEP2：地域課題の共有（5月上旬）

STEP3：若者ができる地域実践＝具体的なプロジェクトを探る（5月下旬）

STEP4：プロジェクトの実行（6～7月）

STEP5：プロジェクトの実践内容と成果をユースフォーラムで分科会として報告するとともに、次年度に向けて反省点などを共有（7月13日）

STEP6：継続して地域と関わっていく（7月～）

### 参加者数

	人数（人）
学生運営スタッフ	23
運営大人スタッフ	4
ボランティア	11
参画団体（分科会）	61
参画団体（パネル）	27
参加者	283
全参加人数	409

### 協力（敬称略、順不同）

★神奈川大学

資格教育課程センター教職課程

JYSP事務局

学生ボランティア活動支援室

生活協同組合

★学校

捜真女学校高等学部

横浜市立東高等学校

産業能率大学（武内千草ゼミナール）

★行政

横浜市

横浜市教育委員会

神奈川区

神奈川県立青少年センター

神奈川県警察 戸塚警察署

小田原市

★民間

神奈川区社会福祉協議会

神奈川区斎藤分南部町内会

神奈川区多文化共生ラウンジ

神奈川区地域子育て支援拠点かなーちえ

公益財団法人よこはまユース

あおばコミュニティ・テラス

NPO法人good！

NPO法人アクションポート横浜



## プログラム

**第I部** 開会式、趣旨説明 (30分)

**第II部** 分科会・パネル展示 (120分)

### 【分科会】

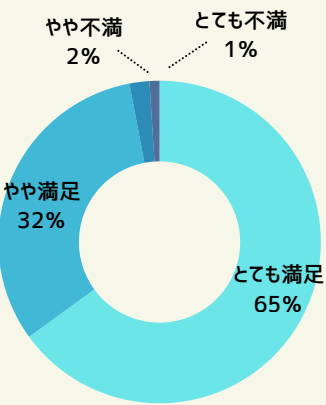
テーマに即して課題解決にむけて学生同士が議論し、提案するワークショップ。

- ①食「学食王は俺だ！-横浜キャベツ編-」
- ②多文化「身近な多文化に触れてみよう！」
- ③子ども「今後の外遊びのあり方を考えよう！」
- ④町内会「町内会の活動をのぞいてみよう！」
- ⑤防犯「守ろう。地域の子供たち！」
- ⑥居場所「住みやすいまちづくり」
- ⑦ワークキャンプ「一歩踏み出して知らない世界を見に行こう！」

**第III部** リフレクション、評価 (20分)

リフレクションの後、その場でアンケートQRに回答してもらうことで回答率を上げる工夫をした。

「かながわユースフォーラム2025」の満足度 n=256

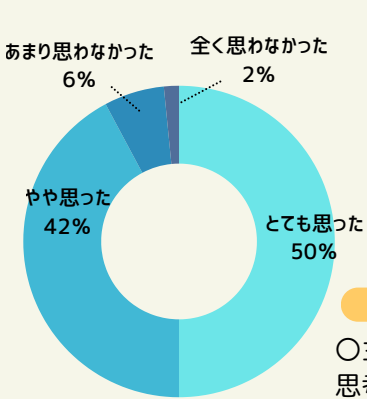


参加者の満足度

**97%**

(かながわユースフォーラム2025報告書より抜粋)

今後、地域活動(神奈川大学周辺)に参加したいと思ったか n=256



参加したいと思った

**92%**



学生が作成した顔出しパネルを入口に設置したところ多くの来場者が写真を撮っており、好評を得た。

120分を3クールに分け、参加者は2つの分科会とパネル展示を回る。

今回初めての試みとして、5つのパネルに説明ブースを設け、パネル展示参加者を二つのグループに分け、ブースありパネルと展示のみのパネルを約15分ずつ入れ替えて閲覧するという仕組みを実行した。

### 【パネル展示】

学生が実践してきたテーマや行政の取り組み、地域のボランティアのパネル展示をする。

- ①SDGs「高校生とSDGs」
- ②神奈川区「2年後何の年か知ってる?~2027年に向けて~」
- ③食農「食と農の学び」
- ④ジェンダー「おもちゃとジェンダー」
- ⑤学習支援「JIN-KANA学習塾の活動」
- ⑥青少年センター「潜在的なボランティア層への支援」
- ⑦ボラ室「学生ボランティア活動支援室に来ると何ができるのか?」
- ⑧NPOの活動「街にたくさんの主人公を」
- ⑨ボランティア学習論「私たちが目指したい未来:SDGsから考える」
- ⑩社会教育論「ようこそカフェ さくらリビングに行ってみた」など

### 参加者の声

○主体的に参加できるブースが多く、社会教育についてじっくりと思考をめぐらすことができた。実践的なものもあってとても勉強になった。

○グループワークや意見交換などで関心だけでなく、自分の意見を主張することの大切さを学ぶことができた。人の意見を聞いたり、見たりできて、楽しかった。



受講者：33名（社会教育課程3年生）

担当教員：齊藤 ゆか（人間科学部教授）・瀬沼 頼子（非常勤講師）

### ○目的

- ・現場の体験を通して、社会教育の専門職員として必要な「専門知識」「社会教育計画」のあり方、および「関連知識」の理解を深める。
- ・地域における社会教育活動に対して、社会教員の専門職員がどのように対応するのか、その学習援助のシステムや方法を理解する。
- ・市民の学習活動を支援する関連分野の指導者との連携のあり方、およびその具体的な内容を理解する。

### ○社会教育実習先のパターン

Aパターン：都道府県・市町村の教育委員会、自治体における生涯学習施設等

Bパターン：国立青少年教育振興機構の全国の青少年教育施設

Cパターン：その他 各種青少年教育団体（民間団体等を含む）生涯学習施設（公設公営、公設民営等）

### ○社会教育実習の流れ

「社会教育実習Ⅰ（前期）」は、実習先の自己開拓から始まる。実習先決定後、事前学習として地域の概要や社会教育実習施設の特徴や特色ある事業などについての調べ学習に取り組みながら、実習先担当者との連絡を取り合い、実習日程や内容の詳細をつめていく。

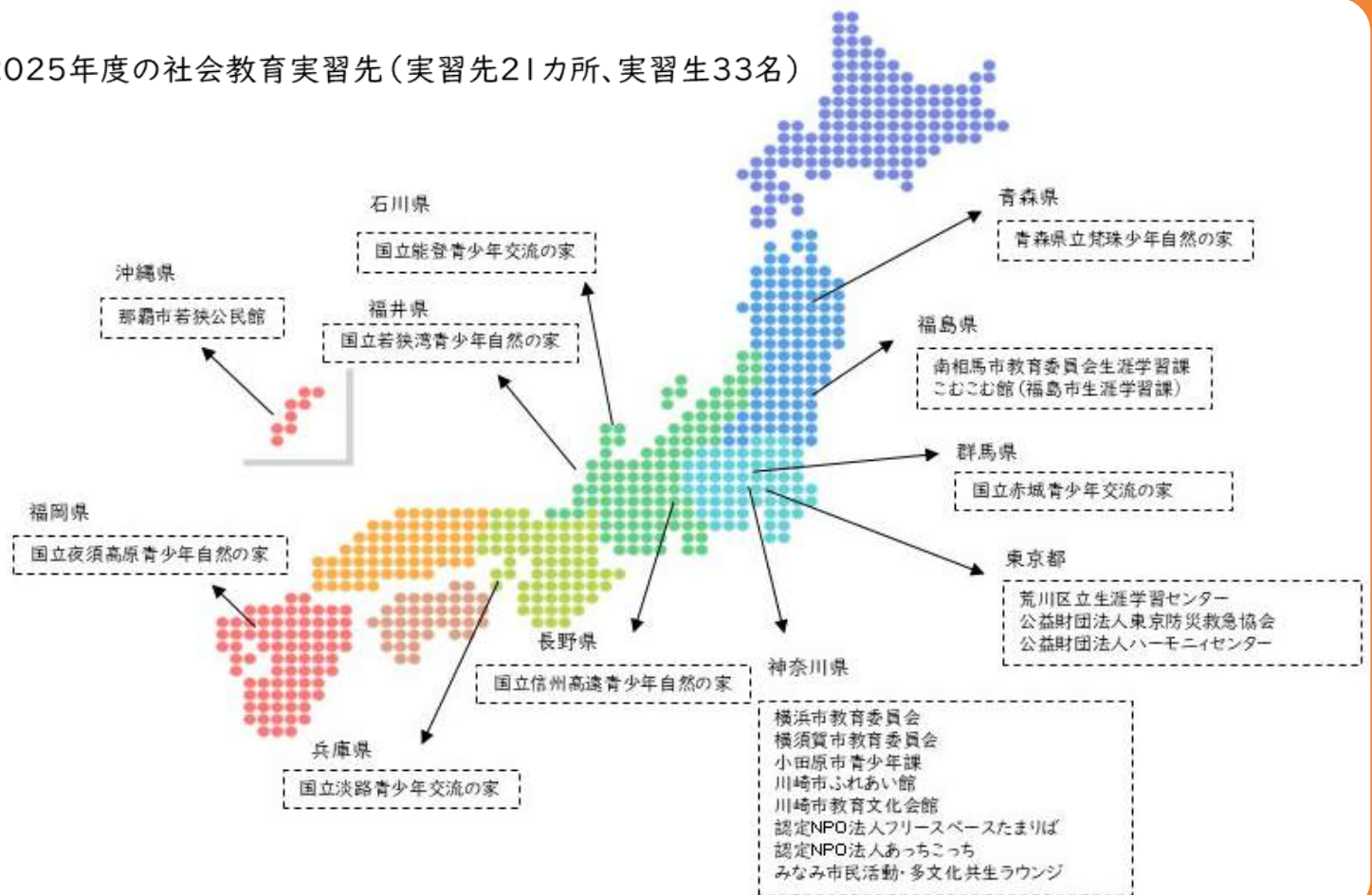
実際の現場実習は、8月から11月までの間、一人あたり40時間以上（5日間から10日間程度）行う。その間、各自で1日の活動記録や振り返りの日誌をつける。

#### 【実習中の課題】

- ・社会教育施設・機関における学習者(利用者)に関する理解を深め、利用者の学習要求や当面する課題について理解する。
- ・社会教育施設・機関の役割・機能を学ぶとともに、他の学習機関との連携のあり方を学ぶ。
- ・社会教育主事の専門職としての基本的な資質について、実践を通じて学ぶとともに、自己を客観的に見つめる機会とする。

「社会教育実習Ⅱ（後期）」は、実習後の事後学習として、実習での学びを振り返り資料にまとめて報告会で発表を行うほか、報告書の作成に取り組む。

2025年度の社会教育実習先(実習先21カ所、実習生33名)



# 社会教育実習 体験記2025

## 能登青少年交流の家

人間科学部 人間科学科 3年 永喜 若菜

実習を通して、社会教育が子どもたちの成長を支え、その“良さ”を発見する重要な場であることを実感した。特にリフレッシュ夏キャンプでは、子どもが安心してチャレンジできる環境づくりの大切さを学ぶことができた。安全確保などの物理的環境に加え、失敗を受け入れる雰囲気やポジティブな声かけといった精神的環境が、子どもたちの挑戦意欲を大きく支える。

社会教育の現場で多様な価値観を持つ大人が関わることで、学校では評価されにくい個性にも気づくことができ、子どもたちの自信につながる。今回の実習を通じて得た学びから、今後は自分も他者の良さを見つけられる大人として社会教育に関わりたいたいと強く感じた。



## 東京防災救急協会

法学部 自治行政学科 3年 鈴木 仁翔

本所防災館での5日間の実習では、地震・火災・風水害などを体験型で学ぶ防災教育の現場に携わった。開館準備からツアー補助、来館者案内、安全確認、売店対応まで幅広く経験し、後半には地震体験ツアーの説明役も任された。利用者は高齢者や子どもだけでなく、観光客や企業研修、外国人など多様で、防災館が社会全体に開かれた施設であることを実感した。実習を通して、防災は知識を持つだけでなく、相手に分かりやすく「伝える力」が重要であると学んだ。来館者の反応を見ながら説明を工夫する中で、自分の言葉が誰かの安全につながる責任も感じ、将来消防士として防災教育にも関わりたいという思いがより強まった。

## 横浜市教育委員会

経済学部 経済学科 3年 西村 杏雪

実習先の横浜市教育委員会で、社会教育の実習を行った。実習では、子どもアドベンチャーカレッジを中心に、企業やNPOが行う体験型プログラムの見学・運営の補助に参加した。学生サポーターとして子どもと関わる中で、短時間の関わりでは信頼関係の形成やコミュニケーション促進が難しいことを実感し、安心できる関係性や関わり方の重要性を学んだ。また、地域づくりにおける行政の役割は、住民や子どもが主体的に関われる土台を整えることであると理解を深めた。実習を通して、地域と学びをつなぐ社会教育の意義と、主体的に行動する姿勢の大切さを学ぶ機会となった。



## 夜須高原青少年自然の家

法学部 法律学科 3年 菱川 太地

私は、「72時間チャレンジキャンプ」の運営支援に携わった。実習では、キャンプ中では班付きのサポートとして参加した。また、実習生として、チャレンジキャンプの準備・片付け・参加者に対する支援、施設利用者に対する受け付け、対処点検などを行った。学んだことは、指導者として安易に答えを与えず、子どもたちの試行錯誤を「待つ」ことで生きる力を育むという「引き出す姿勢」の重要性である。また、安全管理や良好な職場環境を作るためには、日常的な会話でコミュニケーションが不可欠であると実感した。今後は、この場で学んだことを教育や地域社会に携わっていく中で活かしていきたいと考えている。

## 那覇市若狭公民館

人間科学部 人間科学科 3年 与那覇 新菜

私は那覇市若狭公民館で5日間の実習を行い、上映会や多文化カフェ、アート部、喫茶むすぶ、ウォーキング講座など地域に根ざした多様な事業に参加した。活動を通して、公民館が地域住民にとっての「居場所」として機能していることを実感した。特に、強制のないゆるやかな関わり方や、人とのつながりを通して安心感が生まれる点が重要であると学んだ。また、公民館が利用者目線で常に形をアップデートしている姿勢にも感銘を受けた。今回の実習から、居場所づくりには関係性の構築や受容の姿勢、批判的思考による改善が不可欠であると理解し、今後の自身のビジョン実現に活かしたいと考えている。



# 現場実習が育てる「複眼的思考」

齊藤 ゆか（社会教育課程 専任教員）

社会教育人材は、「地域の多様なステークホルダーとの信頼関係を築く」ことに加え、『『つながり』や『かかわり』を創り出し、協力し合える』関係構築の力が求められる。

しかし、こうした関係性を構築する力量は一朝一夕に身に付くものではない。また、地域現場からは「学生にどのように関わればよいのか分からない」という声も聞かれる。そこで本誌では、ローカルな地域密着型の現場実習を通じて、学生がどのように複眼的思考を育むかについて考察したい。

## (1) どんな地域コミュニティの実践現場が良いの？

地域をフィールドとした現場実習では、「地域に対する当事者意識」の醸成が不可欠である。私の所属学会では、優れた実践現場について4つの条件を示した（福祉教育・ボランティア学習学会2024）。それは、①実践の目的やねらいが明確であること。②多様な人たちによる協働実践が行われていること。③リフレクションが丁寧に行われていること。④実践テーマが今日的で、かつ社会とのつながりを有していること、である。

## (2) 社会教育士に求められる職業能力とは？

社会教育実習を終えた学生22名（2024年度）と、「社会教育士」に求められる職業能力について討議した。その結果、「A班. 人と人をつなげるコミュニケーション力」「B班. 地域理解力」「C班. 行動を移すエンジンをつける」の三点が挙げられた。うちA班によるCUDBAS分析の結果は表1の通りである。「コミュニケーション」「寄り添い」「仲介・支援する」など具体的な能力が明らかになった。

## (3) 現場実習を通じて「複眼的思考」をどう深めるか

現場実習では、学生は段階的に思考を深めていく。図1は、単一の視点から複眼的視点へと深化していくプロセスを表している。①「私」の気づきから始まり、②当事者との出会いと対話を通じて視点が揺さぶられる。さらに③多様な他者や専門家との相互理解を重ねることで価値観が更新され、④個人の経験は組織や地域社会へと接続される。

この循環的プロセスを通して、学生は個人と社会、実践と構造を往還しながら、社会課題を多角的に捉える「複眼的思考」を獲得していく。このように現場実習は、身体と感情、場所と問題が結びついた生きた学びの場である。

<詳細はこちら>

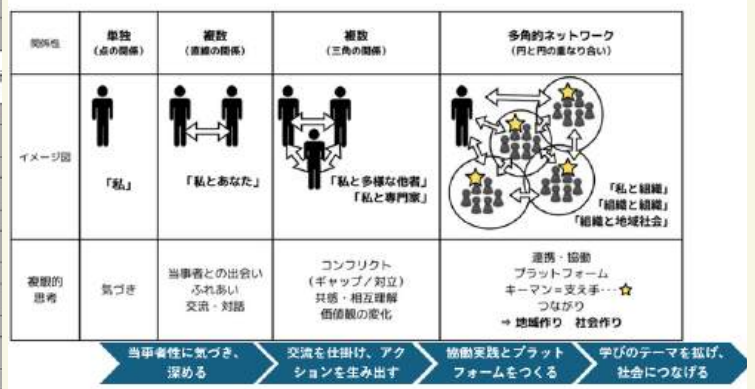
佐藤彩, 齊藤ゆか (2025)「現場実習を通じた複眼的思考の育成: 子育て支援に関わる社会教育実習を例にして」『神奈川大学心理・教育研究論集』(58) PP.35-45



表1 社会教育士に必要なとされる能力と仕事リスト

仕事	能力									
	1-1 A	1-2 A	1-3 A	1-4 A	1-5 B	1-6 B	1-7 B	1-8 B		
コミュニケーションをとる	誰にでもオープンな態度がとれる	コミュニケーションスキルを高める	人から信頼されるような態度がとれる	意見や考えを人に伝えることができる	話を聞き出すことができる	困っている人に話を聞けることができる	初めて来た人に話しかけやすくなる	地域の人と日常的に交流できる		
2 寄り添う	2-1 A	2-2 A	2-3 A	2-4 A	2-5 B	2-6 B	2-7 B	2-8 B	2-9 B	
3 仲介・支援する	3-1 A	3-2 A	3-3 B	3-4 B	3-5 C	3-6 C				
4 積極的に行動する	4-1 A	4-2 A	4-3 B	4-4 B	4-5 C					
5 地域を理解する	5-1 A	5-2 A	5-3 A	5-4 B	5-5 C	5-6 C	5-7 C			
6 多様性を理解する	6-1 A	6-2 A	6-3 B	6-4 B	6-5 B	6-6 C	6-7 C			
7 チームワークをとれる	7-1 A	7-2 A	7-3 B	7-4 B	7-5 B	7-6 B				
8 連携・協働する	8-1 A	8-2 A	8-3 B	8-4 B	8-5 B					
9 スキルアップする	9-1 A	9-2 B	9-3 B	9-4 B	9-5 C					
10 社会教育に関する知識がある	10-1 A	10-2 A	10-3 A	10-4 B	10-4 B	10-5 C				

図1 複眼的思考が育まれるプロセス



注: 佐藤, 齊藤 (2025) から加筆

注: 2024年度神奈川大学社会教育課程受講学生作成、能力の重要度ABCの基準は森 (2020) による

## 学生企画2025

### 社会教育演習 (MMC) 「文化の対話」 イラン編

開催日時：2025年11月19日(水) 2限 (10:50~12:30)  
場 所：神奈川大学みなとみらキャンパス  
参加人数：企画者7名、参加者5名  
ゲストスピーカー：ショクウ・サーメ( Shokouh Same )氏  
担当教員：瀬沼 頼子 (非常勤講師)



#### ○目的

日本で外国籍の方が働くことの困難を知り、解決のために学生は何ができるのかを考える。

#### ○内容

イラン出身の留学生であるショクウ氏の講義を聞き、「日本の生活で困っていること」から一つ選んで学生視点で解決策を考える。

#### ○参加者の声

外国の方から直接、課題や感じていることに関しての声を聴く機会がなかったことで、貴重な体験になりました。特に、「建前」や「失敗に対する恐れ」は日本人でも理解することが難しいと感じます。困難を感じている外国の方には手助けをしたと考えました。(国際文化交流学科 4年 Y.M)

#### ○企画者側からの視点

ショクウさんは英語で会話をしていますが、私は英語が不得手でご不便をおかけすることも多く、準備が足りなかったという反省点が残りました。しかし、ショクウさんと講座前の打ち合わせでいつも素敵な笑顔でお話しして下さって、気持ちがとても和みました。当日も、身振り手振りや写真をたくさん見せていただき、異国イランの文化とショクウさんのことについて知ることができました。講座開講にあたりご協力いただいたショクウさん、本当にありがとうございました。講座を終えてさらに、異文化理解するというステップの前に、異文化を知ることが大切だと感じました。これからも知る機会を多く用意できるような、社会教育を目指していきたいと思います。

(日本文化学科 4年 N.A)



#### ○企画者側からの視点

今回の講演を通じて、多文化共生は「特別な支援」ではなく、私たち自身の意識と行動の変革から始まるのだと強く感じました。特に、質疑応答で出た「偏見と区別の違い」について「その国に対する印象(ステレオタイプ)をそのまま個人に当てはめることは偏見になり、その人個人から見られる事実をもとに判断することは区別である」というお話しはとても印象的でした。まずは「やさしい日本語」を使うこと、そして何よりも「偏見を持たずに、違いを理解しようとする」ことから始めていきたいです。日下様、王様、貴重な講演をありがとうございました！(国際経営学科 3年 T.S)



### 学生企画2025 「多文化共生」を考える

開催日時：2025年12月3日(水) 2限 (10:40~12:30)  
場 所：神奈川大学みなとみらいキャンパス  
参加人数：企画者6名、参加者6名  
ゲストスピーカー：館長 日下晋輔氏、館長補佐 王慶紅氏  
担当教員：瀬沼 頼子 (非常勤講師)



#### ○目的

「多文化共生」について、現状と課題、そして解決のヒントを考える。

#### ○内容

前半は多文化共生の現状についての講義、後半は「私たちにできることはなにか」についてグループワークを行う。

#### ○参加者の声

まずは、隣人である外国人の方に関心を持ち、挨拶や簡単な会話から日常的なコミュニケーションを始めることが、相互理解の第一歩につながるのではないかと考えることができました。

○連携(公財)横浜市国際交流協会(YOKE) みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ



## 学生企画2025

### 社会教育演習 (YC) 先輩のお話を聞こうの会

開催日時：2025年11月18日(火) 1限 (9:00~10:40)  
場 所：神奈川大学横浜キャンパス 20号館  
参加人数：企画者6名、参加者21名(3年) ゲスト5名(4年)  
担当教員：齊藤 ゆか (人間科学部教授)



#### ○目的

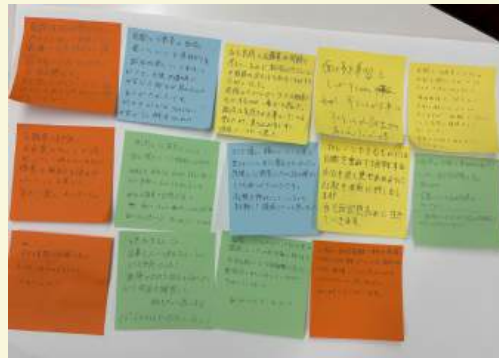
すでに就職活動を終えた4年生の就活体験談やアドバイスを伺い、今後の進路選択や就職活動の参考とする。

#### ○内容

1人の先輩につき5~6人のグループを組み、15分×3クールで先輩の話を聞く。

#### ○参加者の声

公務員試験は独自の対策が必須なため、先輩から具体的な「勉強法」や「開始時期」を直接聞ける点は、我々3年生の不安解消に直結する企画になってよかった。一個上の先輩から聞いたことが気軽に質問することができ、気になることも深掘ることができた。(法律学科 3年 H.T)



#### ○企画者側からの視点

今回「先輩のお話を聞こうの会」を企画・運営し、授業内でどのように時間配分をすれば良いか、どうしたら実りのある会になるかなど様々な事を考え、頭の中でシミュレーションを行ったりしました。しかし当日は自分の思ったようにはいきませんでした。その中でチーム内で臨機応変に対応できたことは良かったかなと思います。

参加者側の感想としても参考になった、就活に対する熱意が上がったなど、多くの方が受けて良かったと言ってくれたことも良かったかなと思います。しかし、改善していかなければいけなかった点もいくつかあったため、その改善点をないがしろにせず次に生かしていこうと思います。(自治行政学科 3年 O.K)

#### ○企画者側からの視点

工夫した点は、来てくださる先輩方全員の話聞けるような形式にしたことです。良かった点として、チームで役割分担をしながら進めたことで、準備から運営までをスムーズに行うことができたことがあります。また、先輩方の発表の時間とその後の質問タイムの時間との配分も良かったと思います。改善点としては、準備の段階で先輩方に負担をかけてしまったことです。事前に私たちから聞きたいことについてパワーポのテンプレートなどを作れば、もっと負担を減らせるかと思えます。今回、先輩方の実体験をお聞きすることができ、とても有意義な時間を過ごしました。先輩方からいただいたエールを胸に、今後の就職活動に励みたいです。(人間科学科 3年 Y.N)



### 就活ガイダンス！

開催日時：2025年11月25日(火) 1限 (9:00~10:40)  
場 所：神奈川大学横浜キャンパス 20号館  
参加人数：企画者8名、参加者19名(3年) ゲスト5名(4年)  
担当教員：齊藤 ゆか (人間科学部教授)



#### ○目的

就職活動に不安を感じている社会教育課程の3年生を対象に、先輩の体験を通して就活の流れや心構えを学び、今後の就職活動への意欲と自信を高める

#### ○内容

前半は講義形式で、先輩5名による約8分ずつの就活体験発表。後半は4年生1人が3年生5人のグループをローテーションし質疑応答・交流会。

#### ○ゲストスピーカーの声

自分の経験を話す事で、「どうせ自分には無理だ」ではなくて、「公務員試験は努力を続けた人が受かる試験」であると、伝えることを意識した。(自治行政学科 4年 O.K)



## 学生企画2025

### 社会教育演習 (YC) 社会教育現場のリアル

開催日時：2025年12月16日(火) 1限 (9:00~10:40)

場 所：神奈川大学横浜キャンパス 20号館

参加人数：企画者6名、参加者21名 (3年)

ゲストスピーカー：横須賀市生涯学習センター館長・元横須賀市教育委員会  
社会教育主事 高橋直人様、教育委員会事務局教育総務部生涯学習課 主任  
兼社会教育主事 遠藤雅弘様 担当教員：齊藤 ゆか (人間科学部教授)



#### ○企画者側からの視点

#### ○目的・内容

「社会教育に関わるキャリア」について、実際に社会教育の現場で働いてきた方々から学ぶため、講義とインタビュー形式で行った。

#### ○参加者の声

高橋さんがあげた社会教育士に必要な能力は以前学生間でおこなったクドバスの結果と当てはまるところが多かった。一方、遠藤さんが考える能力は授業で扱われていない能力だったため、新たな視点を学べて、自分になかった考え方を知れることが社会教育の楽しさだなと実感した。(人間科学科 3年 K.H)

「社会教育主事のキャリア」について主事経験のあるゲストスピーカーから話を聴くことで、社会教育のイメージを深め、学んできたことを言語化できるきっかけになればと思い企画しました。準備に取り組む中で最も重視した点は、参加者が最後まで集中できる環境をどう作り出すかです。100分全て講義形式では変化に乏しいと考え、教室を前方後方で分けて、参加者入れ替え制でゲストスピーカーに話してもらう案が出ました。けれど室内の規模やゲストスピーカーの負担を考慮し、講義形式を基本に置きながらパネルディスカッションと質疑応答の時間を設けることで、講座内容に緩急を出せたことが良かったと思います。(人間科学科 3年 K.H)



#### ○企画者側からの視点

当日まで、どうしたらかながわユースフォーラムの魅力が1.2年生に伝わるのか、何をしたら楽しんでくれるのか考えて、ギリギリまで準備を行いました。当日の準備でも間に合ったのは、チーム内でそれぞれがやるべきことを理解し、しっかりと役割分担をして準備に取り組むことができたからだと思います。イベントの最中、予定していたクイズが行えないトラブルがありましたが、その時にも臨機応変に時間配分やゲームの数を変えたことで、参加者の方に楽しんでもらったのだと思います。企画を成功させるには、個人でそれぞれが役割を全うし、チーム内で協力することが大切だと改めて感じました。(人間科学科 3年 I.S)



### 3年生企画「クリスマス交流会」

開催日時：2025年12月23日(火) 4限 (15:20-17:00)

場 所：神奈川大学横浜キャンパス 20号館

参加人数：企画者6名、参加者21名 (1.2.3年)

担当教員：齊藤 ゆか (人間科学部教授)



#### ○目的

社会教育課程を履修している3年生と1・2年生の交流。

#### ○内容

「かながわユースフォーラム」についての説明後、ゲームを通じた先輩後輩の交流会を行い、今後の社教のイベントについてカジュアルな場での質問会とした。

#### ○参加者の声

クリスマスやこれまでの授業内容にちなんだ企画が工夫されており、学びと楽しさが両立した会でした。先輩方のように社会教育を学ぶことで得られる魅力や経験を、これからの後輩に伝えられるよう、私自身の学びを深めていきたいです。





塩澤 凌生

人間科学部  
人間科学科



- ①静岡県田方郡函南町
- ②静岡県田方郡函南町生涯学習課
- ③コミュニケーション能力と主体性
- ④横浜市役所
- ⑤社教での学びは他では体験できないものが多いので、学びを大切にしたいです。あとは、就活で社教をやっていた良かったと思う日が必ず来るので、自信を持って取り組んで欲しいです。



三田村 捺希

人間科学部  
人間科学科

- ①新潟県妙高市
- ②認定NPO法人たまりば フリースペースえん
- ③「言語化する能力」です。授業で何度も言葉にする、文字にすることをやってきてその能力がよりついたと思います。
- ④衣料品販売
- ⑤社教でできた仲間、関わった人たち、みんながかけた時間は後になって思い出しても「楽しかったな」「やってよかったな」「あの時に戻りたいな」と思えるぐらい素敵なものに絶対なります！



# 社教の学びをキャリアに活かす



長山 璃歩

国際日本学部  
歴史民俗学科

- ①神奈川県平塚市
- ②神奈川県平塚市教育委員会
- ③自主的に動く力がついた、プレゼンテーションの数を重ねられたことで、発表に対して苦意識が減った。話し合いの場で意見が多く言えるようになった。周りを見て吸収する力を伸ばすことが出来た。
- ④神奈川県内神社
- ⑤実習などは特に大変なことも多いと思いますが、授業を重ねる中で力が付いているという実感が持てると思うので、最後まで頑張ってみてください！



高梨 瑛士

経済学部  
経済学科



- ①千葉県佐倉市
- ②千葉県佐倉市教育委員会社会教育課
- ③ひとつの考え方だけではなく、いろんな角度から物事を見る力がついたと思います。人によって見え方や感じ方が違うことに気づき、それを前提に考えられるようになりました。
- ④千葉県佐倉市役所
- ⑤社会教育で学んだことは思っている以上に自分の力になります。授業や実習での経験は無駄にならないので、これからも前向きに取り組んでみてください。



藤田 悠菜

人間科学部  
人間科学科

- ①山形県天童市
- ②(公財)ハーモニィセンター
- ③人前で話すこと、周りの話にしっかりと耳を傾けることが自分の意見を形作ること、やってみることの大切さを学んだ、より広い分野に興味を持つことができた。
- ④民間企業
- ⑤何事も経験だと感じた社会教育課程でした。大学で作るコミュニティはとても貴重なものです。沢山のひとと話して人の価値観に触れて、豊かな感性を養ってください。何事も楽しんで！



高木 柚香

人間科学部  
人間科学科



- ①神奈川県横浜市 ②(公財)ハーモニィセンター
- ③相手の話を聞く力、自分の気持ちを伝える言語化力、プレゼン力がついた。依頼文やメールなどの礼儀が身についた。初めての場所に飛び込んで様々な人と関わることで自分に自信がついた。
- ④民間企業(銀行業)
- ⑤社会教育課程の講義は、取らなくても卒業できる「やらなくてもいい」ものですが、そのプラスアルファで行ったことがとてもためになったと感じています。授業や実習と並行して就活を続けることは大変ですが、その経験が自分の力になり、糧となる瞬間が必ず来ます。頑張ってください！

- ①出身地
- ②実習先
- ③社教を通じて成長したこと
- ④就職先
- ⑤後輩へのメッセージ

## ドイツの青少年育成から学ぶ

齊藤 ゆか（社会教育課程 専任教員）

ドイツの青少年育成活動は100年以上の歴史を持つ。その目的は、「主体形成」と「民主主義教育」を根付かせることにある。

今やドイツでは4人に1人が移民背景を持つ移民社会である。それ故、子ども・若者を巡る「家族の民族的・文化的・物質的・宗教的・教育的背景」の多様性は前提となる。一方、排他主義の台頭により、民主主義社会は世界的に揺らいでいる。社会教育を専門とする我々は、あらゆる差別や貧困等の社会課題に向き合う必要がある。

私は2023年と2025年に「日独青少年指導者セミナー派遣事業」として、ドイツ訪問（各2週間）をした。2023年は「子どもと若者の貧困」、2025年「社会におけるすべての若者の平等な参加とエンパワーメント」をテーマとした。本誌では紙幅の都合上、社会教育の未来につながる要点を紹介したい。

### （1）若者をエンパワーメントする仕組み

ドイツでは国際ユースワーク機関IJABが中心となり、若者のエンパワーメントに重点をおいた青少年育成政策を展開している。各州で青少年育成計画のインフラ整備が着実に進められている。一方、日本では子育て支援が重視される一方、青少年教育分野は予算や人員が縮小傾向にある。

### （2）若者の自己決定と社会参加を促す

貧困や社会的排除に対峙し、若者の自己決定や社会参加が可能にする自立支援の環境整備が、多様な専門職との連携で進められている。特に、27歳までの若者が職業を得るまで、若者との対話を重ねた若者職業サービスが充実している点は特徴的である。

### （3）ユースワーカーは＜社会教育福祉的＞の専門職

ドイツでは、社会教育と社会福援助活動を統合した視点から若者支援が行われている。教育と福祉を横断する専門職は、日本の社会教育に比べると広範な役割を担っている。

以上から、未来を担う「若者支援」のあり方や、ユースワークの専門性について、さらなる検討が必要である。それは、私の次なる研究課題でもある。



ポツダム（サンソーシ宮殿）



ポツダム（ブランデンブルク門）

## 小田原×学生

### ❌ 出会いのきっかけは？

出会いは2013年、私が小田原市社会教育委員に任命され、先に委員だった齊藤先生と出会いました。

2019年に小田原市教育委員に任命された時、社会教育委員を辞しましたが、神大に地域コーディネーターという職ができるということで、やってみないかと誘われ、今に至っています。

### ❌ おだわらPGの始まりは？

「横浜の大学生と海里山川、歴史文化の揃っている小田原を繋げたい」という先生の強い思いから、小田原の資源を活用するプログラムを考え始めました。

小田原では、耕作放棄地や一次産業の担い手不足、地域の担い手不足などの課題を抱えています。そこに横浜の学生が足を運ぶことで小田原にとっても何かのきっかけになれば、と思って始めました。



## ～小田原の魅力を学生に伝える～

### ❌ どんなプログラムを作ったの？

#### 玉ねぎ×下中地区

2022～2025年まで、5月の玉ねぎ収穫に合わせ実施。小田原の農業の課題、獣害についても学ぶ。66名協力：小澤園芸

#### みかん×早川地区

2021～2025年まで、計4回みかんの収穫を行い、小田原の林業の課題、耕作放棄地について学ぶ。88名協力：鈴木和宏氏

#### 梅×曾我地区

2023～2025年まで、計3回梅の実の収穫を行い、梅干し作りを行う。58名協力：ジョイファーム小田原

#### アジ×早川地区

2024、2025年アジを捌き、フライにして食し、小田原の魚について学ぶ。43名協力：ヤオマサ㈱

#### 森林×久野地区

2023～2025年、木の伐採後、林業の課題や森林について学ぶ。51名協力：小田原市森林組合

#### まちづくり

加藤市長の授業内にて、万年地区、曾我地区にて地域との連携を学び、提案を行う。

### ❌ 今後はどうしていきたい？

5年間で私自身もより深く小田原を知ることができました。神大と小田原市が包括連携協定を結んだこともあり、今後も学生を小田原に呼び込む仕掛けを作っていきたいです。耕作放棄地の開拓や農作物収穫の手伝い、小田原産の素材を使った商品開発、小田原の子どもとの交流、若者目線でのまちづくりの提案など、可能性は無限と思っています。

小田原市教育委員  
益田麻衣子



### みかんうどん開発！

2022年、廃棄みかんについて問題提起があり、みかんうどんの開発、販売を行った。プロジェクトメンバーが卒業すると続けられないという課題が残った。10名協力：久津間製粉㈱

忙しい時や辛い時こそ、いったん立ち止まって振り返ってみてください。

私たちが学びの過程で様々な経験をしています。その瞬間だけでは受け止めきれないほどの情報や刺激があり、自分の経験自体やどのような時にどう感じたのか、意識化することなく、「なんとなくこうだった」で終わってしまうこともあふり返りを行うことで、ぼんやりとしていた経験を自分のものにする事ができます。その経験がどのような意味や価値があったのかを考え、個々のシーンをつなぎ合わせることは、一つのストーリーを紡ぎ合う営みと言えるかもしれません。ぼんやりとしか受け止めていなかった経験を、改めて捉えなおすことで、重ねてきた学びを「私」として価値あるものとしていくことができるのではないのでしょうか。

本を読んで学ぶことは一人でもできます。社会教育では一人で学ぶことを「自己教育」と言い、一人で学んだことを持ち寄って複数の人々で学び合うことを「相互教育」と表現します。学校教育である大学の授業も同様に、自己教育と相互教育が行ったり来たりしながら学びが展開されます。一人で思い悩む時、仲間に出ただけでホッとすることもあります。グループ討議での何気ない発言からハッと気づくこともあります。仲間との学び合いには、支え合う仲間づくりにつながるなど、多様な可能性が秘められています。

ですが、選択を誤ることもあります。私は妻から、時々「夫の選択を間違っただ」と言われます。誤った場合は、そこからどのように動いていくのか、改めて学び直せば良いと思います。

誰もが充実した豊かな人生を送りたいと願っていることでしょうか。「充実」「豊かな」の中身は人それぞれだとは思いますが、希望する人生を送るためには、より確かな選択が求められます。例えば大学受験の時、「私」は何を学びたいかを考え、そのことを学べる大学はどこなのか調べたのではないのでしょうか。「私」が今ある「私」であることは、連続した選択の結果だと言うことができます。だとするならば、より確かな選択のために必要なことは何なのか、私は学ぶことだと考えます。

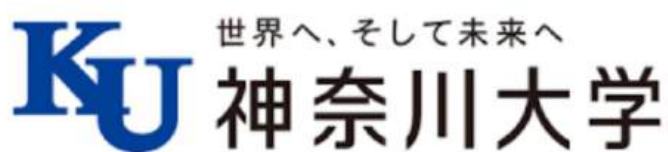
### コラム 3

## 学びの可能性とふり返り

高井 正

(社会教育論  
地域デザイン演習Ⅲ  
社会教育経営論Ⅰ 担当)





2026年2月発行

発行：神奈川大学社会教育課程 横浜キャンパス  
神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1

編集：神奈川大学社会教育課程 齊藤ゆか  
地域コーディネーター 益田麻衣子・木下直子

連絡先：神奈川大学資格教育課程課 045-481-5661 (代)